



札幌北口広場総合整備事業

札幌駅北口の融雪槽

公共空間の高度利用を目指す

札幌駅北口では、平成 10 年度の完成を目指して通称“きた未来広場”の総合的な整備が進んでいる。その内容は鉄道とバスやタクシー、自家用車の乗り継ぎをスムーズに行える「駅前広場」、付近の交通渋滞の緩和策として期待される約 200 台の収用能力を持つ「地下駐車場」、南口地下街と連続する「地下歩道」といった、都心部の交通環境の快適化・安全化をはかる複合的な施設整備事業となっている。

なかでも特徴的なのは、「都心北融雪槽」で、都市の中心部にある総合広場に雪処理機能を組み込んでいるという点で、世界的に見ても類例のない先進的な施設といえる。

札幌で 3 番目の大型融雪槽

札幌都心部の雪対策事業の要ともなる「都心北融雪槽」は、札幌市内の大規模融雪槽としては厚別融雪槽と発寒融雪槽に続いて 3 番目の施設となる。

厚別と発寒が下水道事業の一環として整備された郊外型の融雪槽なのに比べ、都心北融雪槽は雪寒道路事業の一環として都市の中核部に整備されている点が特筆できる。

札幌市では北 10 条から南 6 条まで、東 3 丁目から国道 230 号（石山通）までのエリアを「都心圏」として、きめの細かい除排雪作業を行っている。従来、このエリアでは年間約 50 万 m³ の雪を排雪しており、都心から 10 数 km 離れた郊外の雪堆積場や豊平川の河川敷に設置された雪堆積場までダンプトラックで運搬し処理していた。これにともない沿線では騒音や振動、交通渋滞といった問題が発生していた。



完成予想図

こうした問題の解決策として、都心北融雪槽は大きな役割を担うことになる。1日約4000m³（ダンプトラック約280台分）、1シーズンで「都心圏」から運搬排雪される量の約半分にあたる24万m³の処理能力を持ち、あわせて都心圏のほぼ中央、エリアの端からでも約1km圏内に位置することで、運搬排雪作業の効率的な運用を可能とするのである。また、従来の雪堆積場が広大な敷地を必要としたのに対し、ここでは日中にバス乗降場として利用しているスペースの地下に融雪槽を設けることで、限られた空間の有効利用をはかっている。都心部で主に夜間に行われる除排雪作業の際には、バス乗降場がダンプトラックの投雪作業場となる。

■ 来年1月より試験運用開始

都心北融雪槽は札幌駅北口付近の地域冷暖房用に利用されている札幌エネルギー供給公社のエネルギープラントから送られてくる90℃の熱水を熱源とする。

熱交換器によって融雪槽内は常に40℃ほどに保たれ、ゴミや泥を沈澱させた後10℃程度の下水として排出される。なお、この設備は冬期以外は災害時に備える4000m³の耐震型防火水槽としても利用される。

平成10年1月からは試験運用を行い、3カ月ほどの期間で10万m³の雪を処理する予定だ。世界にも例のない1シーズンに5mもの積雪がある大都市・札幌。その中枢となる地域の円滑な経済・社会活動を支える新たな雪対策の柱として、都心北融雪槽には大きな期待が寄せられている。

● 都心北融雪システム図

